

想



随

虚しく短く燃え

緒方 惇

「この夏のロマンの旅は」とか「ニューサマー・レジャー大特集」とか「遊んで稼ごう海・山のアルバイト」とか：夏という気候はただでさえ、どうして誰でも開放的になってしまふのに、今年もはやくから、若い人向けのコマ

のチューブを切って使ったりした。紙は再生紙であるから、よほど根気よくととこすらないと字が消えるより先に紙が消えてしまう恐れがある、物を大切にと誰に言われなくとも大切にしないと自分が困るのである。遊ぶの色々知恵をしばらく合せて考えた。再生ゴムの手まりが手に入った時のうれしかった事、誰が考え出したのか古毛糸でカバーを編むのが流行した。跳ねすぎるのと少しでも長持ちさせるのにカバーは一挙両得と言う訳なのだ。その頃の事が身にしみているのか、私はすぐ「もったいない」と言う、子供達は、お母さんのケチと言う、ワンピースがオーバードラスになったりすると捨てられる運命の、この流行おくれの服も二度目のおつとめが出来るのである。しかしその反面、何でも捨てる事が出来ないで物が溜ってしまい、転勤族の我が家には、私の溜め魔は困った存在となる、今の若い主婦は捨てるのが上手である、ある意味では私など見習うべきかもしれない。もう戦後三十年、この豊かさがあたり前になり、多限りある資源を大切に多と叫ばれても、あふれるようにある品物を見て育った戦後の若者たちには、自分達の事と感ずるはずがない。しかし平均寿命はのび、乳児の死亡率も減り、人口は増す一方である。食べたいものを食べ、着たい物を着、いらなくなつた物、余つた物はどんどん捨て

シャルがさかんにヤングを煽動した。心臓が弱いにちがいない私など、それを見聞きするたびに、ひやひやしている。思えば去年の夏のはじめ、私が住んでいる熊本市内といつても金峰山系の山あいの、時折り、健康保持に軽い登山姿でもくもくと足を運んで行く人が通るくらい静謐な山道に、突然狂ったような激しい爆音を響かせて疾走する二台連れのバイク族が登場した。かなり急勾配で上下する坂道がつづくので、彼らにとってスリル満点のおもしろいコースであったのだろう。その彼らがパタッと姿を見せないようになつたのは、それから二ヶ月とはたたないあどだつた。近所の人の話によると、強い雨風の日の深夜、ひとの乗用車で国道をとばし、大きな事故をおこして二人とも即死したという——それが年齢的にまだ無免許で——信じられないようなことがおこってしまったのだつた。

風景は、たった一年前とはほとんど変わっていない夏のそれであるのに、去年のあの少年たちは、もうこの世にいない。ピカピカに光っていたお揃いのヘルメットや大型のバイク、そんなメカニク的な物と音だけがなまなましくて、逆にそれぞれの顔や姿はわからなくなつた彼らは、いかに今昨今のティーンエイジャーを象徴していたようで、それだけに一層痛ましい。

先ごろ、第六回大宅壮一ノンフィクシ

る、便利で楽な生活をする為にどんどん自然を破壊してゆく、こんな事をしていたら、きっと困る時が来る、それはおぼろげに誰でもわかつていることではあるが、豊かさに慣らされてしまつた今では、後もどりするような気持になる。「物を大切に」簡単なようでむずかしい事であろうが、私はこれからも、ガラクタの中で「もったいない」をくり返し子供に言い続けてゆくとする。ケチなお母さんだつたと笑って思ひ出されるように平和が続くことが一番望ましいのだが……

(主婦)

「赤か白か」

福島 次郎

水産高校では、毎年、禪問題で、職員会議が大いに紛糾する。夏休み直前、一年全員に遠泳訓練が数日施されるのだが、その時、水泳パンツにするか、従来通り白の六尺禪にするかの議論である。禪反対派は、見苦しい、時代遅れと笑われる、人権蹂躪等と言う。一方、禪は遭難の際、いろんな役目を果たす、わが校

ヨソ賞を受賞した「涙をたらした神」のなかのノボル少年は、彼らとくらぶべくもない昭和五年という昔日の、さらに貧しい家庭の少年であるが、なんと幸せに感じられることだろう。ノボルはかぞえ年六つの男の子であるが、父親、三野混沌という筆名の詩人と、この記録を書いた母親、吉野せいさんとが入植した、阿武隈山脈の中の開拓部落で育つた少年である。時には一家で菜の花を煮て食事にするほどのきびしい暮らしで、ノボルはたいてい小さな背中に妹を背負わされている。青渕が一本、彼の鼻からたえずするすとたれさがり、ぼろ着物の右袖はびゅつとひとこすりするたびに、ばりばりびかびかになる。それでも、ノボルは、はだして野山を駆けめぐり、いつも何かを根気よくつくり出すことに熱中している。小さな手が驚くほど巧みに、小刀や鉋や鋸を使いわけるのであつた。

(詩と真実同人)

ノボルには、たとえ玩具ひとつねだつても買って貰えず、母親はお尻を向けて畑を耕やしてばかりいても、いつもしつかりと、正確に届いている、おふくろのまなざしがあつた。私は自分のこともふくめてしみじみと思うのである。いまの子どもたちが見て育つた私たちのまなざしは、一体どうだつたかしら……と。

物を大切に

森内 省子

「又そのこつとう品さげて行くの？」と私に言われて「へへへ」と笑って出かけてゆく長女。赤い布にアップリケをした、その手さげ袋は今年で十一年目、中学三年の長女が入園の時、絵本袋として作つてやつたもので、持つ所はすり切れ、アップリケもはげかけているが、どうしても愛着があるようで手離せないでいる。幼稚園の頃は大きくて引きずりそうに感じた手さげ袋だったが、今は、親よりもはるかに大きく育つた長女には小さく感じる、何でもこの手さげのように大切に長く使つてくれたら良いのに、とふと思う。

使い捨てをあたり前のように考えている現代っ子。この子供の頃、私達は戦後の一番物のない時代で、消しゴムも大豆粒ぐらいのをまだ大切に使つたものだ。もっとも大豆粒ぐらいでも本物の消しゴムを持つていた子はましな方で、自転車

の海辺だったので、殆どの職員は知らずに終わった。厳しきで鳴る通称「鬼の力丸」教諭の指揮による天草灘の紺碧の海原と白砂と赤禪の群像とのハーモニーを、山本君は真剣にカラーで撮つた。これは五月に放映され、好評だつたらしい。このあと、新聞部員が一年にアンケートをとつたら、九割の者が、禪の方が気分が引き締まると書いていた。さて、遠泳の季節が近づく。職員は殆んどが（今年ぐらひは能先生もあきらめるだろう）と予想していた矢先、今年から赤禪にしますと能宣言——白禪でさえ人権蹂躪といきまいていた若い教師達も啞然。それからの禪会議の難航したこと、それはそれは、回を重ねること三回戦。幸いなるかな。私はたまたま出張で、禪会議に一度も出席せず。このズルサ。喚びかかると教師たちに抗して、能先生は最後にこうきつぱりと言つたらしい。「遠泳指導の責任は私にあります。禪が駄目と決まったら、遠泳の責任者を辞退します。私はこれに首をかけていきます」先のアンケートの結果を知っていた校長は、ここで能先生の肩を持ち、赤禪でいくと決定した。さて、今年もまた、その時期の近づくと。今年もまた、そのとも西洋式になつてしまふか。この春去つてきた、天草の北西の涯ての高校の噂が知りたいものだ。（六月三十日記事）

(詩と真実同人) (熊本商業高校教諭)